

## 介護ビジネスの両国の融合

吉川 孝子

6月3日（土）成都市の四川大学華西医学院で「日中医療養老総合国際学術フォーラム」が開催されました。

日本からは、鳩山由紀夫元総理の基調講演「介護愛は国境を超える～日中国交 45 周年にあたり」に続き、千葉県介護施設（株）リエイ・桜澤一社長による「日本的介護の海外展開」の講演、中国からは四川大学華西病院胡秀英看護部主任による「医養融合～適正人材への育成注力」と、中日友好会館交流部部長による「中日養老提携と資源の繋がり及び人材派遣」等の講演が終日開催されました。

### <高齢化社会への対応>

老齡化社会※から老齡社会※となるまで日本は 24 年間かかりましたが、中国は日本より短期間で突入する予定です。2030 年代後半には 65 才以上の人口が 3 億人を超えることが予想される社会でベッド数の不足、介護人材の不足が大きな課題となっています。フォーラムでも中国の介護施設の大きな問題として、入居高齢者の扱いの雑さ、薬の大量投与などが挙げられていました。

また、フォーラムでは両国の見識者の一致した意見として「老齡化社会から超老齡社会」に対応していくためには「自立のための介護・支援」が重要であるとされていました。すでに一部では「生涯勉強だ」と積極的に自立を目指す活力ある老人も増えているとのことで、重慶の渝中区にある「山城老人大学」は申込日の朝 4 時から企業退職者、公務員退職者が申し込みに殺到しているそうです。

### <溝を埋める努力>

今回のフォーラムに出席させて頂きましたが、日本と中国（西部地区）の介護サービスにはまだまだ高齢者に対する考え方に大きな隔たりがあります。

例えば、中国では高齢者の介護は家族が自宅で行うこと、又施設に入居した場合は部屋に隔離してしまうと言った習慣が根強く残り、日本の企業が中国の介護に参入するには、中国の文化、生活習慣や施設の現状に対しての認識が必要不可欠である様に思えます。

また、中国に進出している（または過去に進出した）日本企業が「中国はビジネスの難しい国」だと結論づけ挫折している一番の要因は、日本企業と合弁先との相互理解の不足があります。日本の介護事業者は高い質のサービスを目指し、またそれには当然高いコストが必要と考えています。一方、まだ介護ビジネス経験の浅い中国企業では、介護にコストをかけるという意識が低い現状です。まだ中国企業には、入居者への思いやりを重視する日本式介護サービスの良さがビジネスに結びつくと思われていない。あるいは、現段階の中国の状況に合わないと考えられているということです。結果、自国の考えで中国介護を押し量っている日本企業と効率を重視する合弁先の中国企業との間との事業方針に軋轢が生まれています。

介護サービスに参入するのであれば現地の生活、文化を尊重しつつ実践し、日本のサービスと融合させる事が不可欠であり、体力、忍耐力なくして成功は得られないのではないのでしょうか。

※老齡化（高齡化）社会：総人口に占める65歳の割合が7%以上の社会

※老齡（高齡）社会：総人口に占める65歳の割合が14%以上の社会

